

修士論文要旨

2010年1月

発達に特別な支援が必要な子どもの母親の健康問題に関する検討

指導：石川利江教授

桜美林大学大学院 国際学研究科

人間科学専攻 健康心理学専修

修士課程2年 学籍番号 208J5015

辻本すみ子

目次

第1章 序論	
第1節 はじめに	4
第2節 研究の背景	4
第2章 先行研究	
第1節 障がい児をもつ親のストレス反応尺度	5
第2節 母親のストレスに影響を及ぼす要因	8
第3節 問題提起	11
第3章 本研究の目的と意義	
第1節 本研究の目的	11
第2節 本研究の意義	12
第3節 基本概念の定義	12
第4節 仮説	15
第3章 研究方法	
第1節 調査対象	15
第2節 調査方法	15
第3節 調査内容	15
第4節 研究の倫理的配慮	18
第5節 分析方法	18
第4章 結果	
第1節 調査対象者の属性と特徴	18
第2節 障がい児の母親の心理社会的健康度尺度の作成と妥当性の検討	22
第3節 障がい児の母親特有のビリーフ尺度作成の妥当性の検討	28
第4節 障がい児の母親特有のストレス関連要因の検討	29
第5章 考察	
第1節 対象者の特性	52
第2節 障がい児の母親の心理社会的健康度の作成と信頼性・妥当性の検討	54
第3節 障がい児の母親特有のビリーフ尺度作成の妥当性の検討	55
第4節 障がい児の母親特有のストレス関連要因の検討	57
第7章 総合考察	63
引用文献	65
謝辞	69
A P P E N D I X	70

「発達に特別な支援が必要な子どもの母親の健康問題に関する検討」要旨

第1章 序論

はじめに

核家族化が一般化し、家族の機能は縮小弱体化し、様々な問題を出している。血縁・地縁型子育てネットワークに支えられていた子育てが、その弱化和ともに個々の家族、取り分け母親の負担増を招いた。ひとり親家庭支援や子ども虐待や社会的養護、障害児の子育て支援など要援護家庭や要保護児童施策の計画進展は遅れている。いずれヨーロッパのような社会的な育児支援が必要となると考えられる。

発達に特別な支援が必要な子ども（ここでは以下「障がい児」とする）を構成員としてもつ家族には、①障がい児を育てる 24 時間・365 日の肉体的負担②「障がい児を生んでしまった」という罪の意識に由来する心理的負担③障がい児を育てる際の特別な経費による経済的な負担の「3 重の負担」があるという（石渡, 2009）。障がい児のみでなく家族を含め、ライフサイクルを通した個人のウェルビーイングを支える支援が必要とされている。

第2章 先行研究

2.1 障がい児をもつ親のストレス反応尺度

障害種別や年齢、家族要因などとの関連やストレスの背景となる要因の検討が先行研究において行われてきた。しかし、それぞれの研究において、親のストレスとその影響要因との関連について、一致した見解を得ていない。さらに、使用された尺度（（新美・植村, 1980 植村・新美, 1981 中塚 1984, 1985）は障がい児やその家族を支援するサービスがまだまだ十分ではなかった 1980 年代のものである。

2.2 母親のストレスに影響を及ぼす要因

ストレス理論から見た障がい児の家族に関する研究の検討（中川, 2003a）を参考に、母親のストレスに影響を及ぼす要因をまとめると、以下のように考えられる。

①社会経済的な環境：Quine ら(1991)によると経済的豊かさはストレスを緩衝する効果がある。経済力があれば負担を軽減できるという。また、日本人の母親には育児に関して固有の文化が存在する（山村, 1971）。

②社会的サービス利用状況：障害者自立支援法施行以後、障がい児のサービス利用状況は支援費制度より後退している。（日本小児神経学会, 2006）

③家族環境：ソーシャルサポートでは配偶者間のサポートが最も重要視される。（橋本, 1982a）（Tew ら, 1974）

④ストレス対処資源：母親は子の障害に関して過度な罪悪感（イラショナル・ビリーフ）をもっている。（石野, 2007）

第3章 研究の目的と意義

①障がい児を養育する母親の精神的健康問題を把握し必要な支援を検討するために時代のニーズに合致したストレス尺度を作成する。

②子の障害に関して過度な自責の念をもつ障がい児の母親に特有の育児に関するイラショナル・ビリーフと、ソーシャルサポートとしての配偶者関係、また家族の経済状態が母親の心身の健康に及ぼす影響を検討する。

①と②により現状の把握と、必要な社会資源の開発や適切な支援内容の提案が可能になる。今後、一人ひとりの子どもの個性豊かな発達を保障しながら、その家族の構成員それぞれが自分の価値観に基づく多様な生き方を選択することを可能にする支援を検討する。

第4章 方法

4.1 調査方法：調査期間は2009年6～7月。K市内の特別支援校PTA会員、地域療育センター・NPO・社会福祉法人利用者の保護者981名に調査用紙を配布。自記式。郵送回収。

4.2 調査対象者：1歳から18歳までの障がい児の母親

4.3 調査票：①個人属性②子どもの属性③環境要因（経済状態・社会的サービス利用状況）④職業性ストレス簡易調査票⑤日本版不合理な信念尺度（JIBT-20）（森ら，1994；福井，2003）⑥障がい児の母親の子育てに関する不合理な信念⑦障がい児の母親のストレス尺度 ⑧ソーシャルサポート尺度：ARS（高橋ら，2000）⑨健康に関する自己評価 ⑩自由記述

※⑥⑦は先行文献の検討及び、当事者・専門職にグループインタビューを行い新に作成した。

4.4 分析方法：尺度の妥当性は、ストレス反応尺度を外的基準とする「併存的妥当性」により、信頼性は内的整合性法と折半法により、それぞれの因子で検討した。ストレス関連要因は、重回帰分析により、障がい種別による分析は一元配置の分散分析により検討した。

4.5 倫理的配慮 桜美林大学倫理委員会により承認済み。

第5章 結果・考察

第1の目的であるストレス尺度作成については、尺度名を「障がい児の母親の心理社会的健康度」として、項目の追加の必要はあるが、一定の信頼性と妥当性が認められたが、障がい児の母親特有のビリーフ尺度については、項目の再検討を要する。

第2の目的は、ストレス関連要因の検討であった。ビリーフについては、仮説が支持されて、「母親役割固定感」「母親役割不全感」共に、母親のストレス要因並びに健康度に影響力が大きかった。次に、経済的問題である。経済的な余裕は、ストレスに影響が大きかった。しかしながら、この質問項目に対して他の項目よりも回答が少なかった。これは、経済問題を明らかにすることを嫌う

日本独特の風土によるものと考えられる。

サービス利用に関しては、一般の通念では、ストレスに影響を及ぼして、間接的にストレス反応を弱め、健康度をあげる方向に作用すると考えられている。しかし、研究の結果からは、公的なサービスも民間のサービスも反対の方向に作用していた。サービス利用を抑制する因子の存在が推測される。

配偶者関係は、相手に対して要求度が高くなると、ストレス反応増加の方向に影響を与え、配偶者満足度は、減少の方向に影響を及ぼしていた。

障がい種別による検討では、自閉症スペクトラムをもつ児の母親にストレスが多かった。これは、先行研究を支持する結果であった。発達障がい児の母親に、ビリーフの「母親役割固定感」の得点が高かった。発達障がいの療育体制や教育・就労など支援が確立されていないことが、影響していると推測される。

重症心身障がい児の母親については、「母親役割不全感」が強かった。これは、医療的ケアが必要な子どもが多く、その母親は、自分だけでは児のケアをすることが出来ないと母親役割を完遂出来ないという、不全感を強く感じていると考えられる。

以上の研究結果を踏まえて、以下のことを提案したい。

1. 障がい児の母親の心理社会的健康度のアセスメントの必要性
2. 障がい児のライフステージに応じた家族の健康度のアセスメントの必要性
3. 障がい種別による母親の心理的負担感の差異に配慮した支援の検討
4. 障がい児の母親に特有のビリーフに配慮した心理的援助
5. 障がい告知後、速やかな医療・保健・福祉・心理の専門職のネットワーク化

以上

参考文献

- American Psychiatric Association (2007) DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引き 高橋三郎訳 医学書院
- 安藤忠 (1995). 障がいを持つ子どもをかかえた家族への福祉的援助の課題-ファミリー・サポート・サービスの概要-右田紀久恵編著『地域福祉総合化への途』147-170 ミネルヴァ書房
- Bowlby, J. (1979). *The Making & Breaking of Affectional Bonds*. 『母子関係入門』作田 勉監訳 星和書店
- Droter et al. (1975). The adaptation of parents to the birth of an infant with a congenital malformation: A hypothetical model. *Pediatrics* 56(5):710-717.
- Ellis, A. (1999). 理性感情行動療法 野口京子訳 金子書房
- 船橋恵子 (1999). <子育て>の社会的支援と家族 家族社会学研究 11号 日本家族社会学会
- 船橋恵子・堤マサエ (1992). 『母性の社会学』 女性社会学者による伸社会学叢書2 サイエンス社 2002第6刷
- 船橋恵子 (2006). 『育児のジェンダー・ポリティクス』双書ジェンダー分析11 勁草書房
- 蓬郷さなえ (1989). 発達障害児をもつ母親のストレス要因 (II) - 社会関係認知とストレス 小児の精神と神経, 29:97-107.
- 藤原里佐 (2006). 重度障害児家族の生活 明石書店
- 石川利江・山口創 (1993). 児童における不合理な認知の発達の検討 人間科学研究, 6 (1), 37-45
- 石川利江 (2007). 『在宅介護家族のストレスとソーシャルサポートに関する健康心理学的研究』 風間書房
- 石野陽子 (2007). 『母親が子どもに抱く罪障感の心理学的研究』 風間書房
- 石渡和美 (2004) 「介護保険制度と障害保健福祉施策」日本障害者リハビリテーション協会 ノーマライゼーション
- 伊藤智佳子 (2003). 障害をもつ人の家族の心理 一橋出版
- 伊藤紀子 (1990). 障害児の親のストレスに関する研究 メンタルヘルス岡本記念報, 3, 35-37.
- 柏木恵子 (2003). 『家族心理学-社会変動・発達・ジェンダーの視点』東京大学出版会
- 柏女霊峰・山縣文治 (2003). 家族援助論 ミネルヴァ書房
- 川村有美子・片山弥生・三浦正江ら (2000). 筋ジストロフィー患者の親の精神的健康に関する研究 日本健康心理学会, 第13回大会発表論文集, 298-299.
- 近藤浩子 (2000). 患者と家族の心の健康 病気の子どもを抱える親 精神看護学 I 精神保健学 廣川書店; 137-139.
- 工藤麻由・奥住秀之 (2008). 障害児をもつ親のストレスに関する文献検討 東京学芸大学紀要, 59, 235-241.
- 厚生労働省「平成20年版 働く女性の実情」
- 國分康孝 (1999). 論理療法の理論と実際 誠信書房
- 松岡治子・竹内一夫・竹内政夫 (2001). 障害児をもつ母親のソーシャルサポートと抑うつとの関連について 日本女性心身医学会雑誌, Vol. 17, 1, 46-54.
- 三牧孝至 (1998). 障害児と家族への支援 特集子育て支援の諸課題, 保健の科学, 40(4):304-307.
- 茂木俊彦 (2007). 障害児教育を考える 岩波新書
- 茂木俊彦・近藤直子・白石正久・中村尚子・池添素 (2007). 子どもの権利と障害者自立支援法 全障研出版部
- 森治子・長谷川浩一・石隈利紀・嶋田洋徳・坂野雄二 (1994). 不合理な信念測定尺度 (JIBT-20) の開発の試み ヒューマンサイエンスリサーチ, Vol. 3, (43-58).
- 中川 薫 (2003a). 障害児の家族に関する研究の現状と課題 - ストレス理論からみた文献的検討-日本保健医療行動科学年報, 18, 156-172.
- 中川 薫 (2003b). 重症心身障害児の母親の「母親意識」の形成の変容のプロセスに関する研究-社会的相互作用がもたらす影響に着目して- 保健医療社会学, 14 (1),
- 中川 薫・根津敦夫・宍倉啓子 (2007). 在宅重症心身障害児の母親のケア役割に関する認識と well-being への影響 社会福祉学, 48(2), 30-42
- 中川 薫・根津敦夫・宍倉啓子 (2009). 在宅重症心身障害児の母親が直面する生活困難の構造と関連要因 社会福祉学, 50(2), 18-31
- 中塚善次郎 (1984・1985). 障害児をもつ母親のストレスの構造・(II) 和歌山大学教育学部紀要
- 中田洋二郎 (2005). 子どもの障害をどう受容するか 大月書店
- 中島善明編 (1999). 心理学辞典 有斐閣
- 新美昭夫・植村勝彦 (1980). 心身障害幼児をもつ母親のストレス尺度の構成-特殊教育研究, 18, 18-33
- 日本健康心理学会編 (2008). 健康心理アセスメント概論 実務教育出版
- 日本家族心理学会 (2009). 家族のストレス 金子書房
- 大日向雅美 (1990). 母性の研究 その形成と変容の過程: 伝統的母性観への反証 川島書店
- 岡堂哲雄編 (2008). 家族心理学入門 培風館
- 岡田節子・種子田綾・新田収・中嶋和夫 (2004). 障害児育児ストレス認知尺度の因子不変性静岡県立大学短期大学部研究紀要, 18.
- 岡安孝弘 (1999). 中島義明ら編 心理学辞典 有斐閣
- 小椋たみ子・西 信高・稲浪正充 (1980). 障害児をもつ母親の心理的ストレスに関する研究 (II) 島根大学教育学部紀要 (人文社会科学), 14, 57-74.
- Parsons, T (2001) 『社会構造とパーソナリティ』 武田良三監訳 新泉社
- (財)パブリックヘルスリサーチ (2007). ストレススケールガイドブック 実務教育出版
- Quine, L. & Pahl, J. (1991). Stress and coping in mothers caring for a child with severe learning difficulties: a test of Lazarus' transaction model of coping. *Journal of community and Applied Social Psychology*, 1, 57-70.
- Sheldon, C., Lynn, G. U & Benjamin H. G. (2005) 『ソーシャルサポートの測定と介入』小杉正太郎監訳 川島書店
- 嶋 信宏 (2004). ストレスとコーピング. 氏原寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕編 心理臨床大事典 培風館
- 総務省統計局, 2003: 図0-1-1
- ストレスの事典 朝倉書店 195-243
- Tew B. et al. (1974). Must a family with a handicapped child be a handicapped family? *Developmental Medicine and Child Neurology*, 16, 95-98.
- Tew B. & Laurence K. M. (1975). Some sources of stress found in mothers of spina bifida children: *British Journal of Preventive and Social Medicine*, 29, 27-30
- 竹内紀子 (2000) 療育機関に通う発達障害児を持つ母親のメンタルヘルス 小児保健研究, 59 (1): 89-95.
- 植村勝彦・新美明夫 (1983). 学齢期心身障害児をもつ父母のストレス-「母親用」「父親用」ストレス尺度の構成- 社会福祉学部研究報告, 8, 19-51
- 山村賢明 (1971) 日本人と母 東洋館選